

教 仏 名 聞

第32号

(発行日)

2013年5月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

お念仏に導かれて ③

(名古屋別院主催の「人生講座」
でのお話、前回からの続き)

(お念仏を称え、そのいわれを聞く、それを繰り返すとどういうことになるのか)

そうしますと、〈無明〉といいますが、生きているものを迷いの世界にとどめて、生まれ変わり死に変わりさせていくような、迷いの元ですね。その姿が露わになってくる。

光明のお照らし、お念仏を称えて、そのお照らしに会って、何がそこに知らされるかというところ、〈無明〉が私の上に形をとって、姿をとって現れてきます。

どういう形をとって、迷いの根本がその姿をとってくるかというところ、〈仏智疑惑〉とあって本願を疑う心です。弥陀の本願の思召しを聞いて、阿弥陀様のお慈悲を聞いて、お念仏を称えていると「わかりました。有難う、あーよかったです」なんていう人もいますでしょう、いるでしょうけれど

も、光に照らされたら何が露わになるかというところ、仏法というものを疑って誇る、仏法というものを聞かない、仏法というものを全部はねつけてちっとも聞かない、疑いだらけの心、それが露わとなるのです。

第十八願では、

たとひわれ仏を得たらんに、十方の衆生、至心信樂して、わが国に生ぜん欲ひて、乃至十念せん、もし生ぜずは、正覺を取らじ。ただ五逆と誹謗正法とをば除く。

これは、十八願というのは、「十方の衆生よ、どうかお願いだから念仏申すばかりで助けるという我が誓いを本當と信じてくれよ、我が浄土に生まれることができると思つて安心してくれよ」という阿弥陀様のお勧めです。それは、どうかこの誓いを信じて、助

かってくれよの願いであり、更にはそれをご自身に担われて、信じさせたい、信じさせずにはおかない、私たちに信

じさせて助けようという阿弥陀仏の願いであります。

けれども、その最後に「ただ五逆

と誹謗正法とをば除く」とあります。これは五逆という重罪を犯し、正法を誹謗する、

その者は救いの限りではないといわれているのです。五逆という重罪をつくって、仏法を誹謗する、仏法を否定するものはこの限りではない。助からない者だということです。

五逆というものは、仏法否定のところから出てくる悪で、悪の元は何かというと、仏法を否定する誹謗です。そういう誹謗の姿、それは仏法を聞いても、弥陀の本願を聞いても、それを疑い否定していく姿。そういう姿が十八願文に示されています。

こういう私たちを流転せしめてきた〈無明〉すなわち迷いの根本が、〈誹謗正法〉〈疑い〉の心として、阿弥陀様の光明名号のはたらきによって、やっと見えて出てくるのです。

出てきた時には、阿弥陀様には負けず。不思議ですね

これは…。私を迷わせた根本が、露わとなると、誹謗は負けなのです。負けといいますか、阿弥陀様に摂め取られますね。弥陀の本願を疑つて信ずることができない、正法を否定する、それこそ親鸞聖人は〈地獄一定〉とおっしゃった。

けれども、仏法を信ずることもできず、疑うよりしかない、落ちるしかないその者をこそ〈助けずにはおかない〉、〈丸々引き受けてやる〉、〈そういうものだからこそ私が助けてやる、引き受けてやるから心配するな〉というのが、実は「我が名を称えるばかりで助ける」という本願なのです。広大なものです。そういうところを親鸞聖人は、

仏智うたがうつみふかし
この心おもいしるならば
くゆるころをむねとして
仏智の不思議をたのむべし
と。仏智というのは、阿弥陀様の本願です。本願を疑う罪は深い。私たちは本願を疑つて疑ってきたから迷いを重ねてきたのである。ところが、その疑いが、今度は〈光明・名号〉のはたらきによって知らされる。
それまでわからなかったの

です。疑いの心、無明の心は隠れている。それが、露わとなる。自分の心の本質はこれなのだ、仏法というものをちつとも信ずるものではないのだと。阿弥陀様に反逆しているような存在、それが露わとなる。

そのまま実は、阿弥陀様の仏智不思議は、阿弥陀様の本願は、へそんな奴だから、私が助けてやるのじゃないかと、へ私が丸々助けてやる、心配するな」と。そこまでかけて下さる大悲の大いなる真心であつたと。

このご和讃は、疑う罪を知るならば、そこにこそ、弥陀の本願に助けられなさいと、お勧め下さっているわけです。

お釈迦様のことをちよつと思ふわけですけれども、お釈迦様は悟りを三十五歳の時に開かれる。その悟りを開かれる直前は何かというと、お釈迦様の伝記では、もう悟りを開く前だからよほど浄らかにあって、光明がある程度輝いてきて相当境が高くなつたかという、そういうわけではなくて、悪魔がガーツと押し寄せてきたというのです。

ね。悟りを開く手前の時に：。色々な悪魔が押し寄せてきたということをお伝では説いています。真理というものに照らされてくると、反真理、真理に背く罪がグツと明らかになる。お釈迦様を迷わせていた悪魔が露わになった、その時にはほとんど悟りに近いということでありましょう。

浄土真宗の教えでも、いよいよ聞いて、仏法を聞いて有難うなつて、わかつて、気持ちがよくなつてと、そうできなくて、いよいよ聞いたらいよいよ自分というものは、助からん者であり、仏法をちつとも受け付けない、ちよつと鉄の塊のように、もう落ちるしかないような、そういう反真理的な存在であるということとが知らされる。知らされると同時に、そんな者ならばこそ、へそのままなりで、助からん汝をこそ助けずにはおかない」と、そういう南無阿弥陀仏であると、はじめて知らされるのです。不思議なことです。

称名念仏について親鸞聖人のお手紙の中に、「弥陀の本願と申すは名号をとえんものをば極楽へむか

えんとちかわせたまいたる」と、こうおっしゃつています。これは八十五歳ごろのお手紙です。最晩年のお手紙です。へ弥陀の本願」とは何ぞやといえ、一名号をとえんものをば極楽へむかえる、これが弥陀の本願だ、と。実に簡明です、簡単です。実際そうですね。へ名号を称えるものを極楽へむかえる、浄土へ生まれさせる。ここに、極めて深い大悲がこもっているわけです。

ところで、弥陀の本願を聞いて、「ああ、有難い」と思つてへ南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」とまずは、称えるようになるわけです。称えるようになるので、すけれども、いつのまにやら、称えて何とか助かろう、称えて信を得たいとか救われたいとか、どうしてもお念仏を手段の様にしてしまう。

ところがいかにしても心が開けない。いよいよ称えてもいかんということになつてきて、自分の力が及ばなくなる。とうとう自分を見限るのです。ね。自分の心を見限るのです。まだ、なんとかがんばつたら、なんとかなるように思い、

なろうなろう、と。例えば聞法して、聴聞して、いつかは信心が得られる、いつかは納得ができる、いつかははつきりする、と。私たちの聴聞も自然とそうなっています。

皆さんはどうか知りませんが、私も、一生懸命聞いたらいつかは信心が得られる。一生懸命研修会にもでたら、いつかははつきりする。いつかは納得できる。今は駄目だけれど、と、こうやっぱり自分に対して、買ひ被りがあつたのです。まだ、何とかなると思ふのです。聞いたらわかる。聞いたら信じられる。聞いたら信心がいたただけると、自分自身に自己信頼があるのです。まだ、自分の力で自分の心の中に信心が確立できるというように、自己の能力に対する信頼、自己過信があるのです。ところが、いよいよ聞いてみたら、聞いてわかる奴でも信じられる奴でもない。仏法を疑う、仏様に反逆し続けているような、仏様から逃げ回っていたような存在、それが私だ、となつてくる。

そうすると、称名念仏は、今までは称えてなんとかしようとして、称えることに力が入つていたのですが、称えて

いるけれども、念仏を聞く。聞く念仏に転換する。一声一声において、阿弥陀様の大悲のお心を聞かされるのです。

昔、香樹院徳龍師という方がおられました。香樹院師というのは、我が大谷派の非常に優れた名師といわれています。江戸時代末期の方でございます。香樹院師に關しましてはこんな逸話があります。

大阪に難波別院というのがありまして、難波別院で香樹院師のお説教があつたのです。難波別院の近くにその当時歌舞伎座があり、昔の歌舞伎座といつたら、市川団十郎とかそういうような人気役者が来て演目を演ずる。そうすると、もちろん人が大勢お芝居を見に来るわけです。それを樂しみに行く人が多いわけです。ところが、その当時一番の人気役者が、舞台に出たら見に来ている人が少ないのです。劇が終わって、「今日は、えらい客が少ないじゃないか、こんなことは滅多にないのだけど、どうしてこんなに少ないんだ？」と傍の人に尋ねた。そしたら、その人が言うには、へ実は近くに南御堂（難波別院）とい

うところがあつて、そこで香樹院という名だたる説教師が、お説教をされる、みんなそつちにいつている」のだと。そのぐらい名師と言われた人なのです。信心もあれば、学問もあり、徳も高いというお方でした。その香樹院師が、こうおっしゃっています。

香樹院師曰く

「念仏するばかりで、極楽へ生まれさせて下さるのじやほかに。それを念仏するばかりと云えば、また称えるに力をいれる。そこで法然様の仰せに差別が出来たのじや。ただ称うるばかりで助かることを、聞くのじやほどに。他の同行えもよう云うてくれ」。こういう言葉を残されており

ます。香樹院師は京都の岡崎別院とか総会所とかそういうところでお説教をされた。そうすると、地方の同行が何人かつれだつて、後生の一大事の問題をもって、泊りがけで京都に来て、聞法に励むわけです。で、香樹院師のお説教を何日間か聞いて、いよいよ郷里に帰るといふことで、その人たちが翌朝、香樹院師の部屋に来まして、「いよいよこれ郷里に帰らせていただきま

す。長々お世話になり有難うございました」と、お礼を申し上げる。そしたら、香樹院師が別れ際におっしゃった言葉が、「念仏するばかりで、極楽へ生まれさせて下さる」と。弥陀の本願はそうです。《極重悪人唯称仏》です。「極重の悪人はただ我が名を称えよ」と。「罪はいかほど深くとも称えるばかりで阿弥陀仏は引き受けて浄土へ生まれさせる」とおっしゃっている。念仏申すばかりで極楽へ生まれさせて下さる。

だけれども、それを「念仏するばかりといえ、また称える方に力をいれてしまふ」。実際そうですね。《我が名を称えよ、必ず助ける》と聞けば、どうしても自力の根性がありますから、称えさえすればいい、称えたらいいといつて、称えるところに力が入るのです。これは、先ほどの言葉でいえば二十願というのですね。どうしても、称えるところ、称えればいいのだと受けとるのです。けれども、実は、弥陀の本願が「称えるばかりで助ける」というのは、「称えてこい、頑張つてこい」で

はないのだと。そこを聞きま

は、どういう形で出あつて下さるかというところ、《み名を聞く》というところ、《無量下さるのです。そこを『無量寿経』の十八願の成就文にあらゆる衆生、その名号を聞き、信心歓喜せんこと乃至一念せん。至心に回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。》とあります。《南無阿弥陀仏》と称えておるのだけれども、その称えておるお念仏にこもっている阿弥陀様のお心を聞く。称えている名号、一声一声において、その名号のお心、南無阿弥陀仏のお心を聞かされる。

「我が名を称えよ」というのは、丸々この私どもを救うという、引き受けてやる、その大いなる真心、大悲のあふれるお心を伝える言葉なのだ。それをややもすると、称えておればと、そこに力を入れる。そうではなく、「そのまま助ける」の仰せを聞くのだと香樹院師は仰せられるのです。

だから念仏というものは、むしろ聞きもの。称えものというより、聞きものだ。阿弥陀様は南無阿弥陀仏を称えさせて聞かせて下さる。その一声一声が、阿弥陀様は本願を勅命として聞かせて下さる。南無阿弥陀仏と称えている念仏において、「称えるばかりで助ける」とおっしゃっていることとは、《そのままなりを助ける》という思召しなのです。南無阿弥陀仏と称えていることとは、称えている念仏に《称えるばかりで助ける》という誓い》がか

お念仏というのは、称えて

は、どういふ形で出あつて下さるかというところ、《み名を聞く》というところ、《無量下さるのです。そこを『無量寿経』の十八願の成就文にあらゆる衆生、その名号を聞き、信心歓喜せんこと乃至一念せん。至心に回向したまえり。かの国に生まれんと願すれば、すなわち往生を得て不退転に住す。》とあります。《南無阿弥陀仏》と称えておるのだけれども、その称えておるお念仏にこもっている阿弥陀様のお心を聞く。称えている名号、一声一声において、その名号のお心、南無阿弥陀仏のお心を聞かされる。

りで助けるといふ誓い》がかかっているのだから、南無阿弥陀仏と称えておるといふことは、《そのままなりを助けてやる、心配するな》というお心でありおはたらきの中にいることです。だからそれは、もはや称えているということに力が入っていないと、称えているままお誓いを聞かせていただく。

お名号は、阿弥陀様そのもののお聞かせであり、仰せであり、お心そのもの。それが私に呼びかけて下さっている。だから、南無阿弥陀仏というお念仏は、そのまま一声一声が、如来の仰せであり、本願の名のりであり、阿弥陀様ご自身が、私を大悲をして下さっている姿なのだということですね。

(続く)

【福井別院での法話・座談】

六月二十五日の午後一時より二十七日の午後三時まで。法話と信心座談を繰り返します。福井市内の大谷派福井別院の電話は(0776)214100です。別院に宿泊できます。詳しくは念佛寺にお尋ね下さい。参加自由。

正信偈に学ぶ同答

(五十二)

開入本願大智海

行者正受金剛心

慶喜一念相應後

与韋提等獲三忍

即証法性之常樂

〈書き下し〉本願の大智海に開入すれば、行者、正しく金剛心を受けしめ、慶喜の一念相應して後、韋提と等しく三忍を獲すなわち法性の常樂を証せしむ、といえり。

〈現代語訳〉「本願の大いなる智慧の海に入れば、行者は他力の信を回向され、如来の本願にかなうそのときに、韋提希と同じく喜忍・悟忍・信忍の三忍を得て、浄土に往生してただちにさとりを開く」と述べられた。

*

N 「次に〈慶喜の一念相應して後、韋提と等しく三忍を獲〉についてお話し下さい。まず慶喜の一念とは」
D 「南無阿弥陀仏の名号が〈汝を助ける〉と仰せ下さっている大悲大智の広大なお心（大智海）が私の心に開かれ、もはや二度と壊れない信心として流れ入って下さる、そのすがたをここで更に〈慶喜の一念〉と示されています」
N 「慶喜は喜びですね、一念というのはどういう意味ですか」
D 「一念には三つほどのいわれがあり

ます。一つは、信心が私の心に至るのは〈ひとおもい〉といわれるほど、時間がかからない。あつと

いうまにとどくのです。太陽の光が地球にとどくには八分かかるそうですが、仏心の光が私たちの心にとどくのは一瞬であつて時間がかからないという意味があります」

N 「それは具体的には、どういうできごとなのでしょう」

D 「阿弥陀仏の大悲の仰せ、〈そのままなりで引き受ける〉とのお心を〈ああ、こんな私を〉と聞き受ける端的に、大悲のお心が私の心にとどくのです。聞いているから何時間してとか、しばらくたつてからというのではありません。聞く瞬間に私の心に大悲が流れ込んで、我が心と離れなくなるのです」

N 「不思議ですね」

D 「ええ、それゆえ、人が阿弥陀仏にであうのはいつでも今、可能なのです。死ぬ間際でもまにあうのです」

N 「聞いても私の心にとどくのに時間がかかるなら、死ぬ間際に本願の救いを聞いても救いは実現しないことにもなりかねませんね」

D 「ええそうですね。しかも阿弥陀仏の本願は一度聞くだけで、その時に大悲がどくように出来上がっている法なので、法蔵菩薩は臨終さし迫った悪人も救う法を仕上げて下さったのです」

N 「〈一念〉の別の意味は」

D 「慶喜一念の一念は〈ふたごころのない〉という意味があります。本願の思召しを信受して、本願の思召しにふたごころがない、いわば本願に疑いがない、そういう一念です。いわゆる一心です」

N 「本願にふたごころがないというのは」

D 「〈汝を助ける〉との本願の仰せを〈あ助け下さる〉とそのままに聞き受けていることで、仰せが本当かどうか自分の考えや思惑をさしはさんでいないのです。単純そのものの心です。そういう一念を一心ともいいます」

N 「さらに別の一念の意味は」

D 「この〈一念〉の〈一〉は〈はじめ〉という意味があります。一念とは初めて念（信心）ということ、ながながと生死流転し迷いを重ねてきた私において初めて起こったできごととしての信の一念です」

N 「よく〈永劫の初事〉とお聞きしますが、初めて阿弥陀仏にであったという経験なのですね」

D 「ええそうですね。初めて信心が与えられたこの喜びはこの世のあらゆる喜びとは質の違う喜びです。この世の喜びは直ぐに過ぎ去っていき、色あせていきます。しかし、阿弥陀仏にであった喜びはもう二度と消えず流れ去らない喜びです」

N 「では〈慶喜一念、相應して後〉の相應して後とは」

D 「本願を聞いてその通りに受け入れるの後のことです。阿弥陀仏の本願のお心にぴたりとかなうということが

〈相應〉ということ、それを〈一念相應〉といいます」

N 「阿弥陀仏のお心にぴたりかなうような心が私たちに起こるのでしょいか」

D 「起こるのです」

N 「どうして起こりうるのですか」

D 「阿弥陀仏の本願の心が私の心にとどくと、その心が阿弥陀仏の本願を受け入れるからです。阿弥陀仏の大悲心が流れ入って下さると、それが阿弥陀仏の本願を聞き受ける心になって下さいます。ですから本願の思召しにかなうのです。ということは私どもの凡夫の心でもつては阿弥陀仏の大いなる誓いの心を素直に聞き受けることはできないのです」

N 「阿弥陀仏の慈悲が私の身に浸みて阿弥陀仏の仰せを信じるようになるのです。さきほど臨終間際に初めて本願のお心聞いて救われることも可能だといわれましたが、慈悲が〈だんだん〉身に浸みてとなりますと、臨終間際に初めて聞いただけでは間にあわないといえないでしょう」

D 「阿弥陀仏の慈悲は〈だんだん〉人の心に浸透することあれば、因縁によつては一挙にその人の心にとどくこともあり得るといふ不思議な徳があるので。それを聖人は〈頓にあらす・漸にあらず〉と言われています」

N 「そうですね。〈必ず助ける〉との本願の仰せのままに〈助けて下さることよ〉とそのままに受け入れている、それを本願相應というのです」

D 「ええそうですね。そのように相應すると、そこに〈韋提と等しく三忍を獲る〉ということがいわれるのです」(続)

